

十八世紀のカルティエ・ラタンと

哲学者エルヴェシウスの学生時代〈上〉

——評伝 エルヴェシウス家の人々〈その七〉——

永治日出雄

第一節 十八世紀のカルティエ・ラタンと〈哲学者たち〉の学生時代

(一)

一七一五年セーヌ右岸のジェフロワラスニエ街で出生した哲学者クロード・アドリアン・エルヴェシウスは、カルティエ・ラタンのサン・セヴラン教会において洗礼を受け、十一歳か十二歳のときサン・ジャック街のコレージュ・ルイ・ル・グランに入学した。⁽¹⁾この論文の主要な課題は以後約十年にわたるエルヴェシウスの学生時代を考究するところにあるが、第一節ではカルティエ・ラタンの歴史的形成とそこにおける〈哲学者たち〉の若き群像を素描することに努めたい。

一七六五年に刊行された『百科全書—諸々の学問・芸術・技芸に関する合理的辞典』第十一巻には、カルティエ・

ラタンの概説を含む項目（パリ）が収録されている。十七頁に及ぶこの項目は、ルソー寄稿の（政治経済）と並んでもっとも長文の記述に属し、都市の歴史や機能に関する『百科全書』の代表的な論述と評価される⁽²⁾。そこにはカルティエ・ラタンのさまざまな公共施設に関しても、由来や特色が簡潔に描かれている。項目（パリ）の執筆者シュバリエ・ド・ジョクールは、思想や歴史や芸術だけでなく、地理、産業、医学、生物学、人類学など広範な学問領域に通暁していた。彼はデイドロの片腕として『百科全書』全巻の完成に献身し、自身の担当部分が同書全体の二八パーセント、一万七三九五項目に及ぶ⁽³⁾。哲学者エルヴェシウスをはじめヴォルール、デイドロ、ダランベールなど、多数の啓蒙思想家がカルティエ・ラタンで若き日を過ごした。本稿ではジョクールの論述を導きの糸としながら、こうしたカルティエ・ラタンの歴史的生成と十八世紀中葉の状況をまず把握してみよう。

学芸の中心として著名なカルティエ・ラタンは、シテ島からプティ・ポン橋を渡った南に位置し、ほぼ現在のパリ第五区および第六区にあたる。この一帯は帝政ローマの時代に起源を發し、初期の發達はパリの守護聖女ジュヌヴィエーヴやフランク王国の始祖クローヴィスに深い係りを持つ。四世紀の中頃フン族の王位に就いたアッティラは、破竹の勢いで中部ヨーロッパを席卷し、四五年にはライン河を越えてパリ近郊まで侵攻した。当時のパリはセーヌ河に浮かぶシテ島を意味し、そこにはガリア族の一部が定住していた。こうしたパリの人々は各地におけるフン族の暴虐を伝え聞き、シテ島からいち早く逃走する準備を急ぐ。中世から伝わる古文書によれば、このとき靈感を受けた処女ジュヌヴィエーヴがガリア族の女たちの前に現われ、神への信仰を失わず、郷土と家族を護るよう叱咤した。妻や娘の激励によって男たちもシテ島死守の覚悟を決める。こうした形勢を知ってか、アッティラの兵馬はオルレアン方面へ迂回し、やがてパリ北方のシャロン・シュル・マルヌでフランクⅡ西ゴート連合軍に撃破された。以後ジュヌヴィエーヴはパリの守護聖女として崇められ、彼女の名を付した高い丘に祀られる。その三十年後フランク族を統一した

クローヴィスは、キリスト教への改宗によってローマ教皇の支持をも得、王国の首都をソワッソンからパリに移した。やがて守護聖女ジュヌヴィエーヴゆかりの丘にクローヴィスの遺体も祀られる。⁽⁴⁾以下の引用はこうしたカルティエ・ラタンの発祥とサント・ジュヌヴィエーヴの丘とに関するジョークールの記述である。

鉄の十字架を掲げた相当の遺蹟がいまもラ・アルブ街で眺められるが、ここに共同浴場が造られたのは、ローマ帝ユリアヌスの時代と思われる。西ゴート国王アラリクスを敗死させたのち、五〇八年にクローヴィスはロングリユ神父の意見に従って都を定めた。王の宮殿は山上に築かれ、その周辺へのちにコレージュ・ド・ラ・ソルボンヌが建造される。^{〔中略〕}

〔モペール広場から〕坂を登っていくと、コレージュ・ド・ナヴァールがあり、その学園は一三〇四年フィリップ美貌王の妻、ジャンヌ・ド・ナヴァール王妃によって開設された。その上方に位置するサン・テチエンヌ・デュ・モン教会はきわめて古く、造られた時期をだれも知らない。

この堂宇から小道を通ると、サント・ジュヌヴィエーヴ教会に着く。クローヴィスの創建と伝えられるサン・ト・ジュヌヴィエーヴ教会は、もともと聖パウロ・聖ペテロに奉獻され、ながく聖者に因む名称〔使徒教会〕で知られていた。十一世紀までここには在俗の司教座聖堂参事会員が置かれていた。しかし、これら参事会員の行状がきわめて乱雑であったため、共同生活を営むこと、および聖アウグステイヌスの戒律に服することを、ルイ若年王〔七世〕が彼らに命じた。改革を行うためにサン・ヴィクトルから正規の司教座聖堂参事会員十二名が派遣され、以後ここでは聖アウグステイヌスの戒律が純正に守られる。この施設がフランスにおける最初の修道院となったのは、以上のような経緯からである。

パリ郊外に位置したサント・ジュヌヴィエーヴの修道院は、しばしばノルマン人やデンマーク人の攻撃に

よつて荒廢した。しかし、パリの人々は同教会の管理者よりもはるかに強い熱情をたえず抱き、蛮族から蒙つた被害を早急に修復する。一四八三年六月七日金曜日夕宵九時、九百年以上もまえに建立された鐘樓が落雷に見舞われた。鐘樓は崩れ落ち、鉛で包まれた鐘も焼尽した。四つのイオニア式円柱に支えられ、大祭壇の後に安置された聖遺物匣のなかに、聖ジュヌヴィエヴの遺体が収められている。クローヴィスの墓碑は内陣の中央にある。⁽⁵⁾

クローヴィスの遷都以後パリはセーヌ河の南北に發達し、十二世紀末には人口も十万を超えた。イギリスやドイツの侵略を撃退した国王フィリップ二世^{II}オーグストは、こうした北側の新開地に広大な宮殿ルーブルや中央市場レ・アールを建造する。この地域は古くからの〈シテ(Cite)〉と區別してとくに〈町方地区(Le Ville)〉と命名され、以後とくに政治・經濟の本拠として發展する。ついで彼は一二一〇年セーヌ河南にあるサント・ジュヌヴィエヴの丘と麓を〈大学地区(Universite)〉と名づけ、周圍に高さ九メートル、厚さ三メートルの市壁を築いた。こうした圍繞はラ・トゥルネル河岸の稜堡を東端として、西はサン・ジェルマン・デ・プレ教会近くのサン・ジェルマン門、南はルテチア野外劇場に通ずるポルデル門へと繋がる。現在のカルティエ・ラタンまたは〈セーヌ左岸〉の原形がここに存することは言うまでもない。多くの歴史書に誌されているとおり、フィリップ二世^{II}オーグストによる市壁の建造が外敵に対する防衛のためなされたことは確かである。⁽⁶⁾しかし、『百科全書』におけるジョークールの叙述は、〈大学地区〉圍繞の背後に學問と権力の拮抗、王権による教育の統制が潜む実態にもつぎのとおり言及する。

パリ郊外を初めて市壁で封鎖したのは、フィリップ^{II}オーグストである。そうした郊外には新しい都邑が形成され、南のひとつが大学地区と呼ばれた。もつとも古いコレージュ・ド・ラ・ソルボンヌすらまだ存在しなかつたが、諸学を教える教師が、学生と一緒にそこに住んだからである。〔中略〕

パリのもつとも古い地域に属する大学地区は、広大な拡がりを持ち、同市の第四部分ほとんどを占める。かつてそこは特別の地域として遮断され、自由な出入りが許されなかつた。しばしば学生が騒乱を惹き起し、鎮靜が困難であつたためである。イギリス国王リチャード（獅子王）と組んでサラセン人と戦つたフィリップⅡオーグストは、パレスチナへ出陣するにあたり、大学地区を市壁で封鎖しよう命じた。この指令は一一九〇年に執行される。該当する地域は深い濠と堅固な壁によって圍繞され、要所に築かれた市門と塔が城塞の機能を果していた。大砲の発明以前には、これこそ強力な防衛の手段であつた。現在こうした市壁は残つていない。邸宅を建てるために、濠も埋められた。⁽⁷⁾

ローマ人の征服直後シテ島に創建されたノートル・ダム聖堂は、数世紀にわたつて学問と修業の中心地であり、司教直屬の学長のもとで聖職者の養成が行なわれた。やがてセーヌ左岸のサン・ヴィクトル修道院やサン・ジェルマン・デ・プレ修道院が、より敬虔な修学の場所として次第に世評を高める。また、文法、修辭学、天文学などいわゆる自由学芸を教える人たちが、徐々に宗教的権力から独立し、パリ郊外へ移り住むようになった。スコラ学に批判的なピエール・アベラールも、サント・ジュヌヴイエヴの丘でヨーロッパ各国の学生を集め、その清新な学風で絶大な人気を博した。こうした教師の連合として（大学 *Universite*）という教育組織が、ボロニアと同じくパリでも一一七〇年頃から自發的に形成され、一二〇〇年フィリップ二世Ⅱオーグストは法令によつて教師と学生に法律上の特権を与えた。十三世紀後半にパリ大学では、神学部を中軸に法学部、医学部、人文学部の教学体制が確立する。⁽⁸⁾

こうした（セーヌ左岸）では多くのコレージュが、修道僧の共同宿舍や慈善的な学生寮として發達した。サント・ジュヌヴイエヴ街に位置したコレージュ・デ・ダノワは、パリにおける最古のコレージュと言われる。一二五七年に宮廷礼拝堂司祭ロベール・ド・ソルボンは、サン・ジャック街周辺にいくつかの寮舎を設け、ヨーロッパ四カ国の

貧しい学生を四名ずつ無償で寄宿させた。一三〇四年には王妃ジャンヌ・ド・ナヴァールが、サント・ジュヌヴィエーヴの丘に広大なコレージュ・ド・ナヴァールを建設し、フランス人学生七十名を収容する。これらのコレージュは次第に中等教育の主要な機関に変容し、ソルボンを創立者とするコレージュ・ド・ラ・ソルボンヌがとくにパリ大学神学部と直結した。

絶対王政が頂点を迎える十七世紀には、樞機卿リシュリユーがコレージュ・ド・ラ・ソルボンヌを再興し、摂政マザランはコレージュ・ド・クアートル・ナシオンを創設する。なお、ドミニコ会、オラトリオ会、ヤンセン派などの宗教団体もそれぞれ固有のコレージュを備えていたが、一五六三年イエズス会によって開設されたコレージュ・ド・クレモンは、独自の教育方針によって注目を集める。⁽⁹⁾ここでふたたびジョクール執筆の項目(パリ)を参照し、十八世紀のカルティエ・ラタンにこれら多様な学園が密集していたことを確認しよう。

キリスト教世界において著名なパリ大学は、三六のコレージュから構成され、そのうち十のコレージュが常時開かれている。神学の公立学校としてはソルボンヌとナヴァールが存在する。樞機卿リシュリユーがソルボンヌを復興させ、その礼拝堂に壮麗な霊廟を造った。もつとも美しく、常時開かれているのは、コレージュ・ド・クアートル・ナシオンであり、創立者のマザラン樞機卿に因んでコレージュ・マザランとも呼ばれる。〔中略〕

サン・ジャック街に入り、坂をすこし登ると、パリ大学区におけるもつとも美しい学園のひとつ、コレージュ・ド・プレッシが眺められる。このコレージュを再建するため、樞機卿リシュリユーは莫大な資金を供与された。ここから五十歩ほどのところに、久しくコレージュ・ド・クレルモンと呼ばれ、わずか二年前にイエズス会コレージュと改名した学園が存在する。これに隣接してドミニコ会修道院と名づけられた大僧房がある。

〔中略〕

サン・ミッシェル門の廢墟を通り過ぎ、ラ・アルプ街に入ると、ソルボンヌが眺められる。古いコレージュであるが、枢機卿によって土台から屋上まで壮麗な堂宇に再建された。だから、ここにはリシュリユの豪華な墓碑、ジラルダンの傑作のひとつが置かれている。この建物にある図書館もパリのもつとも美しい施設に数えられる。ジャン王に献呈されたティトス・リヴィウスの仏訳写本、いかにして作られたか判らないが、燦然たる金色細密画に満ちた写本をそこで見る事ができる。

ラ・アルプ街を進み、ソルボンヌを横切ると、一二八〇年パリ教会参事会員ラウル・ダルクルルによって創設されたコレージュ・ダルクルルが見出される。サン・ジェルマン・デ・プレの神父ジャンによって一二二二年建立されたコム教区教会が、すこし降ったところにある。外科解剖学の研究に専念したサン・コムに住居もこの教会の近くに認められる。さきに述べたとおり、ラ・アルプ街にはローマ共同浴場の廢墟が遺っている。

ラ・アルプ街を左に曲がった端で、サン・タンドレ・デ・ザルク街に入る。葡萄や果樹を植えた畑の真中に、かつては小さな礼拝堂があった。古事に明るく人はこの礼拝堂の呼称がサン・タンドレ・デ・ザルクであったと考えている。というのは、近くに広い庭園があつて、学生が洋弓の練習に來たからである。〔中略〕

コレージュ・マザランはかつてネール門が築かれたところにある。このコレージュはとくに広壮であり、図書館は一般に開放されている。大祭壇の絵画はポール・ヴェロネーズの作品、周囲の小さな絵はジュヴネの作品である。¹⁰⁾

フランス啓蒙運動の口火を切ったヴォルテールは、一六九四年にパリまたはパリ近郊シャトネで生れ、カルティエ・ラタンのサン・タンドレ・デ・ザルク教会（サン・タンドレ・デ・ザール教会とも言う）で洗礼を受けた。公証人であった父フランソワ・アルエは、一七〇一年から会計検査院の糖香料収納官となり、家族とともにシテ島の裁判所旧館官舎に住んだ。富裕なフランソワは二台のベルリン馬車、一台の四輪荷車、二頭の馬を備え、パリ内外にいくつかの邸宅を所有したと言われる。アルエ一族はヤンセン派やリベルタンの影響を受けていたものの、一七〇四年に十歳のヴォルテールをコレージュ・ルイ・ル・グランに入学させた。サン・ジャック街にあるこの学園は、一五四〇年イエズス会によって創設され、一六八二年までコレージュ・ド・クレルモンと呼ばれていた。ここにヴォルテールは寄宿生として在籍し、七年後に哲学級を卒業する。コレージュ在学の時代からその文才を称えられた彼は、〈大学地区〉ビュッシ十字路近くのコメデイ・フランセーズで一七一九年十月悲劇『エディップ』を上演し、輝かしい生涯における最初の成功を博した。⁽¹⁾ つぎに引用するとおり、〈最後の哲学者〉コンドルセによる小伝は、若き日のヴォルテールについて比較的詳しい。

ヴォルテールという筆名で名高いフランソワ・マリー・アルエは、一六九四年二月二十日シャトネで出生し、同年十月二日パリのサン・タンドレ・デ・ザルク教会で洗礼を受けた。甚だしく脆弱な嬰兒であったことが洗礼を遅らせ、そのため出生の場所と時期が生涯曖昧となった。〔中略〕

〔父〕アルエの財産は息子にふたつの利点をもたらした。その第一は周到な教育である。これなしには天才もけっして高みに到達することができない。近代の歴史を繙き、第一級のあらゆる人物を眺めてみると、つぎ

の事実が明らかとなる。すなわち、初期の教育に欠けておれば、彼らといえども完璧な作品を仕上げることはありえない。

独立できる財産を生来授かった利点もやはり大切である。生活の資を得るため、己の自由を棄てたり、生きるためやむをえぬ労苦に、己れの天分を埋没させたり、庇護者の偏見や情念に己れを迎合させる不幸に彼はいちども曝されなかった。(中略)

若いアルエはイエズス会士のコレージュに入学した。そこではヤンセン派を除く上流貴族の子弟が教育を受けていた。宮廷で嫌われるヤンセン派は、無自覚のうちに慣習によって宗教を選ぶ人々、世俗的な利益にもっとも叶う宗教を当然にも受け入れる人々の間では稀であった。修辞学の教師であるポレ神父が若いアルエを教えた。ポレは聡明かつ篤実な人間であり、アルエのなかに偉大な人物への萌芽を認めた。ルジエ神父も彼の大胆な想念、自由な主張に感心し、「未来のフランスにおける理神論の統率者」と予言した。これらふたりの占い師がいずれも正しいことを、事実の経過が立証する⁽¹²⁾。

ヴォルテールとともに啓蒙運動の幕開けを飾るモンテスキューは、一六八九年ボルドー近郊の帯剣貴族の家柄に生れた。十一歳のとき彼は故郷を離れ、パリから二十キロ東北のコレージュ・ド・ジュイイに入学する。この学園はオラトリオ修道会に所属する名門校であり、とくに地方の上流貴族が子弟を委ねた。ここでは教理問答やラテン語など伝統的な教科のほかに、フランス語、地理、数学、絵画、乗馬等も教えられる。モンテスキューの幅広い学識と活動はこうした多面的な教養を基礎としたであろう。一七二一年『ペルシア人の手紙』で令名を得た彼は、セーヌ左岸のドフィーヌ街に滞在し、ランベール夫人の文芸サロンでフォントネルやラ・モットと親交を結んだ。ブルボン宮近くの邸宅で一七五五年モンテスキューが逝去したとき、最期まで付き添ったのはジョークールである。サン・シユル

プス教会での埋葬にはデイドロも立会い、ダランペール執筆の弔辞が『百科全書』第五巻の巻頭に置かれた。⁽¹³⁾

『百科全書』刊行の原動力となるドニ・デイドロは、一七一三年ブルゴーニュ地方ラングルで呱呱の声を挙げた。その生家は二百年続いた刃物師であり、デイドロは読み書きなど初歩的な知識を両親から学んだ。イエズス会が経営するラングルのコレージュに入学したのは、一七二三年前後と思われる。ここでの学生は地元出身を主体に総数二百に近く、貴族から職人まで多様な階層の子弟で構成されていた。古典的な教育を重視するイエズス会の影響も受けて、デイドロは刃物師の家業を継ぐことを避け、一時は聖職者として身を立てる道を選んだ。⁽¹⁴⁾ 以後におけるイエズス会との関係やパリでの学生生活については、長女アンジェリック・ヴァンドゥール夫人による『デイドロの生涯と著作に関する回想』が第一の史料となる。

八歳か九歳のとき父〔デイドロ〕は、ラングルのイエズス会士のもとで勉学を始め、十二歳で剃髪式を受けました。〔中略〕

わが団体のためこの生徒が使いものになる、とイエズス会士たちはまもなく感じました。褒めそやして気こそそり、旅行とか自由という甘い餌をいつも投げかけたのです。親の家を出て、受持のイエズス会士と遠くに行く決意をさせました。同じ年齢の従弟と父は仲良しでした。彼に秘密を打ち明け、同伴することを約束させました。しかし、より凡庸で温順であった従弟は、それを自分の父親に話したのです。出立の日も時間も、すべて問いただされました。私の祖父はまったく黙したままでした。ただ、就寝のときに門の鍵を身に付けました。そして、息子が降りてくるのを耳にし、その前に立ちふたがったのです。真夜中にどこへ行くか、と尋ねました。息子は答えます。「パリへ行って、イエズス会士のところへ入ります。」「今夜はいけない。だが、おまえの望みは叶えてやろう。いまは寝ることだ。」翌日父親は乗合馬車の二座席を予約し、パリのコレージュ・

ダルクールへ連れて行きました。そして、質素な宿舍の料金を払い、息子に別れを告げたのです。〔中略〕

新しい学友のなかに悲しげな青年がいたので、父はその理由を尋ねました。作文を明日提出せねばならぬが、できそうもないので悩んでいる、とその青年は答えます。代わりに作ってやろう、と父は約束します。実際に青年は自分の用紙を衣装戸棚から取り出し、父がそこに書き込んで宿題を終えました。教師たちはこれを美事な出来栄だと評価しました。しかし、提出者自身によって書かれたものでない、と彼らは付言しました。そして、だれが書いたかを白状せよ、さもなければ即座に退学させる、と脅したのです。新入りの学生が引き受けてくれた、と青年は告白します。ふたりとも大変な叱責を受けました。父は他人の世話は放棄し、自分の事柄に専念することに決めました。一片の詩が大変な騒動を惹き起したこともあり、イヴを誘惑したとき、蛇がいかにか口説いたかを、詩文にすることになりました。コレージュとしてはなんと奇抜な主題でしょう。

こうして父はコレージュ・ダルクールの勉学を終えました。そこで幾人かの友を得ましたが、のちに樞機卿となった詩人のベルニ神父ととくに親密でした。ふたりは六スーズつ持つて飲食店に行き、一緒に夕食を取りました。この楽しい食事を父が自慢するのをよく耳にしました。

卒業のときに彼の父親はバリの代訴人クレマン・ド・リー氏ともうひとりの同郷人に手紙を書き、法律を勉強させるため、自分の息子を下宿させてほしいと頼みました。父はそれを二年間学びました。しかし、証書類の精査や財産目録の作成にほとんど魅力を感じなかったのです。雇主の目が届かぬすべての時間を、父は足りないと自覚しているラテン語とギリシア語、終生熱烈に愛した数学、そしてイタリア語や英語を学ぶことに捧げました。⁽¹⁵⁾

こうしてバリに出たデイドロは、ソルボンヌから至近の距離にあるコレージュ・ダルクール（現在のリセ・サン・

ルイ)で勉学を続けた。この学院はサン・ジュヌヴィエーヴの丘で組織されたノルマンディー郷人団に源を發し、ルアンの司教代理やエヴルーバイユー教会の学長を歴任したラウール・ダルクールによって構想された。一三一年開設されたときには貧しい給費生の神学課程十二名と人文課程二八名を対象としたが、のちに自費の学生をも寄宿させた。コレージュ・ダルクールの教授陣は人文主義やヤンセン派の影響も受け、ボワロー、ラシーヌ、ニコール、サン・テヴルモン、アベ・ブレヴォーなどの文人を育てている。また、一七一三年から十七年間同学院の校長を勤めた校長ギヨーム・ダグメは、デカルト主義を信奉する哲学教師であり、もつとも著名な学者のひとりとして二期にわたりパリ大学区総長に任ぜられた⁽¹⁶⁾。

ただし、イエズス会士の勧めで都に出たデイドロが、コレージュ・ダルクールに入学したことには疑義が残されている。彼自身が執筆した作品のなかには、コレージュ・ルイ・ル・グランの教師ポレから教えを受けたとの記述が見出される。したがって、サン・ジャック街にあるイエズス会の学園に、デイドロは一時在籍したか、すくなくとも聴講に赴いたと思われる。一七三二年中等教育を終えた彼は、パリ大学から教養課程修了資格を授与された。以後一七四三年に最初の翻訳、スタンヤン著『ギリシア史』を出版するまで、デイドロの二十代は霧に包まれている。しかし、その間パリ大学神学部において神学を学んだこと、また生活の資を得るため数学の出張教授をしたり、演劇の研究にも情熱を寄せたことは確かである⁽¹⁷⁾。

(三)

デイドロとともに『百科全書』の企画を推進したダランベールは、数奇な生い立ちと複雑な自己形成の過程を持っている。一七一七年十一月十七日ノートル・ダム大聖堂近くのサン・ジャン・ルロン教会石段で、木箱のなかにひと

りの嬰児が発見された。この捨て子ダランベールは、文芸サロンの主宰者タンサン夫人と砲兵士官デトゥーシユの私生児であった。治安当局の配慮により彼はマレー地区ミッシェル・ル・コント街のガラス職人のもとで養育される。産みの母タンサン夫人はながくダランベールを認知せず、彼自身もガラス職人の妻ルソー夫人を眞の母親として生涯愛した。しかし、父方にあたるデトゥーシユ一家は捨て子の成長を密かに見守り、やがて貴族に相応しい学園、コレージュ・ド・クアトル・ナシオンに入学できるよう扶助した。⁽¹⁸⁾パリでの出生からコレージュ入学までの経過は自伝「ダランベール自身による回想」において三人称でつぎのように語られる。

フランスアカデミー会員、パリ・ベルリン・ペテルブルクアカデミー会員、ロンドン王立協会会員、ポロニア学士院会員、スエーデン王立芸術アカデミー会員、トリノ・ノールウェイ王立科学院会員であるジャン・ル・ロン・ダランベールは、一七一七年十一月十六日パリで誕生し、生まれるとただちに両親に捨てられた。四歳のとき彼は寄宿学校に送られ、十二歳までそこに留まった。しかし、十歳に達するや寄宿学校の教師は、教えることがなくなつたと言いつつ切つた。彼のもとでは時間を空費するだけであり、第二学級に連結したコレージュに入るのがよいと言う。^{*}ダランベールの体質が病弱なであつたため、二年後の一七三〇年ようやく寄宿学校を出て、コレージュ・マザランで勉学を仕上げることになつた。

^{*}(原註) この教師には愛された、とダランベールはつねに懐かしく回想する。僅かな財産しか有しないため、たいした助けができないのに、彼は生徒たちの勉学を支援した。四歳まで養育してくれた婦人にもダランベールは同じように感謝している。コレージュを卒業するや、彼はこの婦人のもとに戻つて、一緒に住んだ。そこでは三十年暮らし、一七六五年にようやく居を移した。ながい病氣のあと掛りつけの医者が、丈夫になるためより健康的な住居を探しよう、彼に助言したからである。⁽¹⁹⁾

コレージュ・マザラン、すなわちコレージュ・デ・クアトル・ナシオンは、宰相マザランの遺志に基づいて一六八八年財務総監コルベールによって開設された。(大学地区) ネール門に建造されたその堂宇は、とくに雄大な円蓋で際立ち、現在もフランス学士院・マザラン図書館としてセーヌ河畔に屹立している。フランスに併合された近隣四カ国の学生を本来収容する施設であるが、定員六十名に満たぬ場合は他の地方の出身者も受け入れた。ここではブルジョアよりもむしろ貴族の子弟が対象とされたが、入学後に社会的な階層や地位によって学生が差別されることはなかった。この学園もつねにソルボンヌの統率と監察を仰ぎ、学院長には神学部から派遣された博士が就任した。教授、教員、司祭、助手、職員などスタッフの総数は四〇人ほどとされる。学舎に併設されたマザラン図書館は五万冊の書物を蔵し、一般にも開放されていた。⁽²⁰⁾ コレージュに関するダランベール自身の「回想」を辿ってみよう。

コレージュ・マザランで彼は第二学級と二年間の修辭学級を終え、その優秀な成績は学院の記録に誌されている。教師のひとり狂信的なヤンセン主義者であつて、生徒のなかから門弟を育て、将来宗派の先鋭隊にするつもりでいた。さまざまな芸術、とりわけラテン語の韻文を青年が深く愛すること、またそうした芸術に余暇のすべての時間を捧げることに、この教師は頑強に反対した。(韻文は心を枯渇させる)と主張したのである。これこそお得意の表現であつた。恩寵に関する聖プロスペルの詩のほかは韻文を読んではならぬ、と彼からダランベールは忠告を受けた。

哲学の教師である別のヤンセン主義者は、宗派の重鎮とされていたが、それ以上に極端なデカルト主義者と感じられた。二年間に彼は物体の予備運動、生得観念、宇宙物質の渦動しか教えなかつた。

コレージュ・マザランを卒業して、ダランベールは一七三五年末に教養課程修了の認定を与えられる。ついで彼は法学を学び、一七三八年に弁護士資格を授けられた。哲学級の二年間で彼が得た唯一の成果は、コレー

ジュ・マザランでカローから受けた基礎数学の授業である。この学問を講述したカローは、深遠な数学者ではないが、明快さと精密さで秀でていた。この人物こそダランベールがめぐり逢えた唯一の教師である。数学に寄せる彼の愛好は次第に強くなり、法律を学んだ時期も熱情をもって数学の研究に没頭した。幸いその時期には多くの余暇が見出せたからである。教師にも就かず、書物もほとんど所有せず、突き当たった難問を相談するひとりの友人も持たずに、彼は公共図書館に行つて、急いで閲覽し、一般的な解き方を知る。そして、自宅へ帰り、まったくひとりで様々な論証と解答を試みた⁽²¹⁾。

首都においてコレージュ・デ・クアトル・ナシオンは数学の授業を通年開講する唯一のコレージュであつた。しかも、例外的にこの授業はラテン語ではなく、フランス語で行われた。また、マザラン図書館は数学に関しても二千二百冊の蔵書を有していた。この学園でダランベールは数学教授カロンの薫陶を受け、高名な数学者と伝えられる故ヴァリニヨンの講義ノートにも接する。しかし、近代的な教育内容を組み入れながら、なお宗教的な要素の濃厚な母校に、若いダランベールは強い不満と違和感を抱いた。彼自身の「回想」で簡明に述べられるとおり、コレージュの卒業後この天才は生活の必要や前途の不安を乗り越え、ほとんど独学で数学の最先端に進んでいく。法学を学び始めた一七三六年、彼は幾何学に関する最初の論文を書き、一七四三年の業績「力学論」によって解析力学の基礎を築いた。この間に科学アカデミーに迎えられ、デファン夫人の文芸サロンにも招かれる。出版社ル・ブルトンの依頼によって『百科全書』刊行の企画に関与するのは、一七四五年十二月である。ダランベールの「回想」をさらに続けよう。

もはや彼の教師ではないが、なお監督する立場にあつたヤンセン主義者たちが、数学に対するダランベールの熱意に反対を表明した。詩への愛好をさきに攻撃したのと同じ方法、同じ理由によつてである。彼らは退屈きままる信仰の書物を読むよう勧告した。やむをえず彼らに調子を合わせ、機嫌をとりながら、若いダランベール

ルは信仰の書物の代わりに、論争の書物を読んだ。彼の精神にとつてなんらかの糧になるもの、彼の向学心を多少とも活気づけるものが、すくなくともそこに見出せたからである。青年のこうした自己満足に厳格な指導者は満足しなかった。ダランペールも叱責に疲れはて、ついには彼らを嫌悪するに至った。しかしながら、それほど理不尽でない友人たちも、幾何学の研究を諦めるよう説いた。彼に必要な事柄はより確実に財産を作れる職業に就くことである、と。こうして医学を学ぶことを決意したのは、医業に関心をもつからではなく、むしろ自分の好きな勉強、法学の勉強に医学が比較的近いからである。この新しい勉強に専念するため、ダランペールは当初数学の研究を放棄した。所有する僅かな書物も友人の家に移し、誘惑を避けようとした。しかし、段々と元に戻り、ほとんど無意識のうちにそれらの書物をひとつずつ持ち帰った。そして、医学の第一学年が終る頃には、もつとも強烈な関心、唯一とさえ言える関心に身を委ねることを決心した。以後まったく数学に専念したので、初めの頃に深く愛した文学の修業も数年は捨てた。そうした修業をふたたび始めたのは、科学アカデミーに入会した数年後、『百科全書』の事業を始めた時期である。同書巻頭の「序説」は彼によつて執筆されたものであり、二十年間の勉強で習得された数学的・哲学的・文学的知見の精華とも言えよう。⁽²³⁾

パリのコレージュを卒業したヴォルテール、デイドロ、ダランペールなどのほかに、フランスの地方や国外で育つた（哲学者たち）も、一七四〇年の前後にはカルティエ・ラタンへ集まりつあつた。一七〇九年グルノーブルの名家に生まれたガブリエル・ボノー・マブリーは、リヨン在住の長兄の世話でイエズス会士のコレージュに入った。さらに彼は一七歳のときパリのサン・シュルプス神学校に進み、高位聖職者としての修学を続ける。一七三〇年にこの神学校を卒業したとされるが、サント・ジュヌヴィエーヴ丘のコレージュ・ラ・マンシュに在学したとの異説も見出される。いずれにしてもマブリーは聖職者の道を避けて、フランス外務省外交官に任用され、一七四八年公刊の著書

『条約に基づくヨーロッパ公法』によって国際法の權威となった。ダランベールの実母タンサン夫人から彼は文芸サロンに招かれ、彼女の兄タンサン樞機卿の顧問をも勤めた²⁴。

マブリーより五歳下の弟エチエンヌ・ボノ・コンディヤックは、一七一四年九月三〇日グルノーブルで出生し、眼の病氣もあつて十二歳まで家庭で保護を受けた。父の死後リヨンの長兄に引き取られ、マブリーと同じコレージュに入学したと思われる。故郷で剃髮式を終えた彼は、一七三三年首都に出て、パリ大学教養課程の登録を行つた。ジャン・スガールらによる近年の研究によれば、パリにおける彼の母校はおそらくコレージュ・クアトル・ナシオンである。この名門校でダランベールとほとんど同じ時期にコンディヤックも数学や物理学を学んだ可能性が高い。ダランベールに二ヵ月遅れて一七三五年八月、彼もパリ大学教養課程修了の資格を取得する。以後パリ大学神学部に進学した彼は、一七三九年ソルボンヌ学位審査に合格し、二年後司祭品級を授与された。なお、この間に聖職者としての勉強を深めるため、サン・シュルプス神学校にも在籍している。やがてカルティエ・ラタンでデイドロと親交を結び、一七四六年処女作『人間知識起源論』の公刊によって啓蒙思想の哲学的基礎を確立した。デイドロはこの傑出した兄弟、マブリーとコンディヤックに『百科全書』への協力を懇請したと言われる²⁵。

『百科全書』の項目(ペリ)の執筆者ジョークールは、異色の経歴と幅広い学識を持っている。由緒あるプロスタント貴族の末裔として、彼は一七〇四年にパリで生まれた。両親の配慮によってジョークールは、八歳から外国に留学し、教養に囚われぬ教育を受けた。スイスで十代の大半を過ごしたあと、数学や英語を学ぶためケンブリッジ大学に三年間在学した。やがて彼は生物学や医学に関心を揚げ、オランダの大学都市ライデンに移る。この地で臨床医学の大家ブルーハーフェに師事し、一七三〇年医学博士の学位を取得した。ライデンで結ばれた彼の親友テオドル・トロンシャンは、ジュネーヴの名家に属し、のちにヴォルテールやルソーと深く関係する。ライプニッツの百科全書的な学

識に傾倒するジョークールは、「ライブニッツの生涯と著作」と題する論文をこの時期に書いた。一七三六年に彼はパリに帰り、以後は医学博士としてオルレアン公家や晩年のモンテスキューにも助言した。『百科全書』の執筆者として彼の論述が現われるのは、一七五二年に刊行された第二巻からである。なお、当時のジョークールにもっとも親しい文筆家は、共産主義に傾くマブリーおよび徹底した感覚論者コンディヤックであったとされる⁽²⁶⁾。

プロテスタントの都ジュネーヴで生まれたジャン・ジャック・ルソーは、誕生の瞬間に母親を失い、十年後に父親とも離別した。十三歳から彫金師の徒弟奉公を勤め、以後遍歴と放浪の生活を続ける。僅かな期間トリノの救護院やアマシーの神学校に身を置くが、継続的な学校教育には浴しなかった。一七二九年にルソーはサヴォワの貴族ワランス夫人とめぐり逢い、その愛を受けながら音楽、植物、文学への関心を次第に深める。刊行されたばかりのヴォルテール著『哲学書翰』は彼女の文芸サロンでも評判となり、文章の模範としてとくにルソーを啓発した。一七三六年心臓の疾患が悪化したルソーは、ワランス夫人の配慮によりレ・シャルメットの溪谷で療養する。この田園生活では死を覚悟しつつ、自己の勉学計画を作成し、哲学、ラテン語、幾何学、天文学などを学んだ。ワランス夫人との恋は破局に終り、傷心のルソーは一七四〇年リヨンに移って、マブリー家の家庭教師として雇われる。同家の家長ジャン・ボノはリヨンIIフォレIIボージョレ司法長官の地位にあり、(哲学者)マブリーおよびコンディヤックの長兄であった。(哲学者)マブリーによる数通の紹介状を携えて、一七四二年ルソーはリヨンからパリへ出立し、首都ではコンディヤックと親しく交際した⁽²⁷⁾。パリ到着に関するルソーの回想は、『告白』のなかでもよく知られた一文であるが、(哲学者たち)のカルティエ・ラタン集結を的確に伝えており、敢えてここで引用する。

以前の旅行ではパリを不快な面から見たが、今度は輝かしい面から見た。ただし、自分の住いは違う。ボルド氏が教えてくれた住所を探して、ソルボンヌに近いコルドリエ街のホテル・サン・カンタンに投宿した。汚

い街の汚い宿の汚い部屋であった。しかし、ここはグレッセ、ボルド、マブリー神父とコンデイヤック神父、そのほか幾人かの名士が泊まったところである。残念ながら私はそれらのだれにも出会わなかった。ただ、そこで足の不自由なボヌフォンという田舎紳士と一緒にになった。完璧主義で訴訟好きな人物であったが、彼のお陰でロガンと近づきになり、哲学者デイドロとも知り合った。いまやロガンは私の友人のなかでもっとも年長である。デイドロについてはのちに多くを語ることになる。

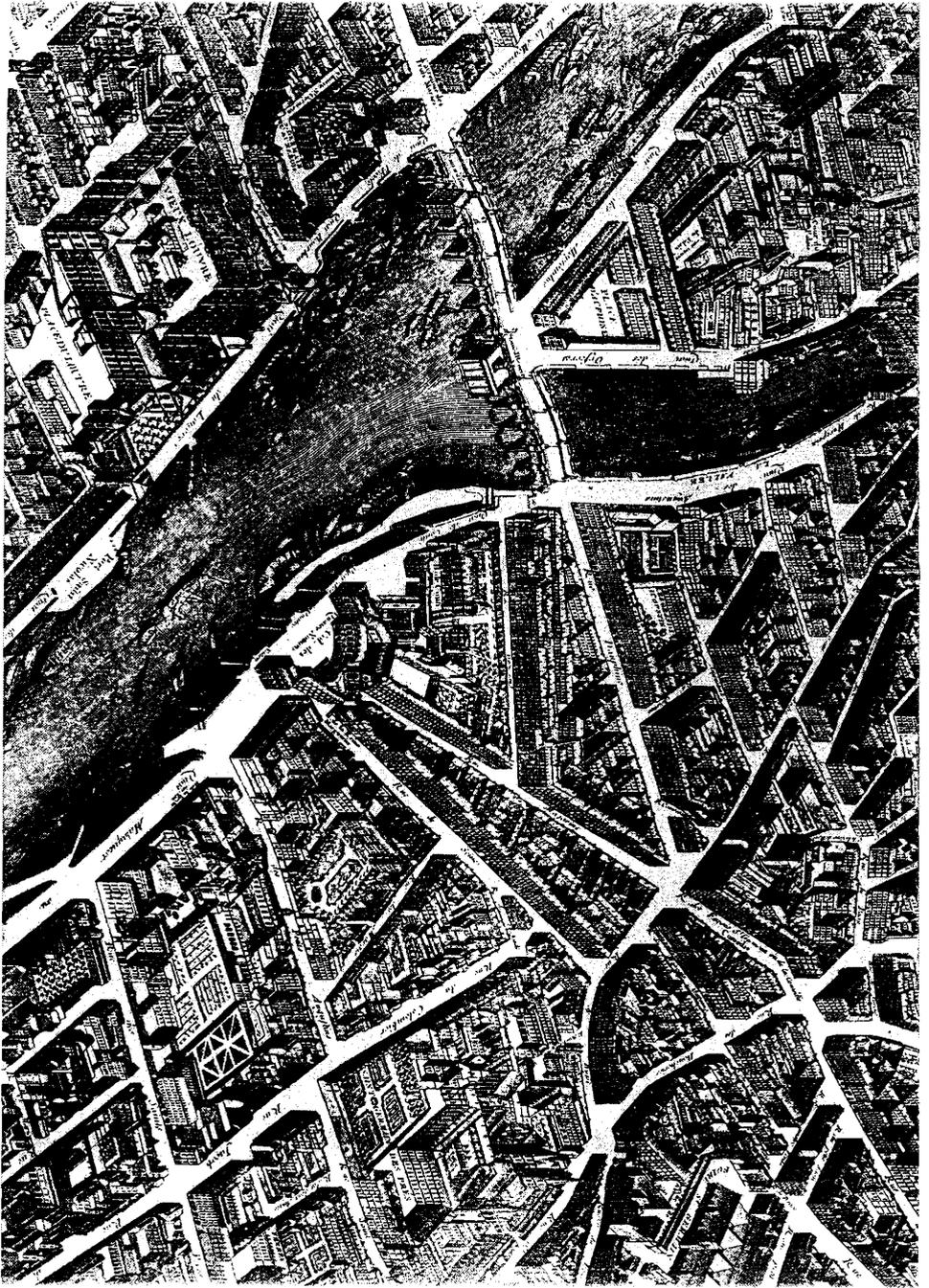
一七四一年秋に私はパリへ到着した。携えてきた現金十五ルイ、自作の喜劇『ナルシス』、それに新案の音楽法だけが資産であり、急いでこれらを役立てるよう迫られた。私はすぐに紹介状を活用した。風采も良くて、才能を感じさせる青年がパリに来れば、かならず歓迎される。私がそれであった。受け入れてはくれたが、たいたことは起らない。紹介された人たちのなかで三人だけが役に立った。サヴォワの貴族ダムザン。彼は当時カリニャン公妃の侍従長を勤め、その寵臣であったらしい。碑銘アカデミー秘書官で国王賞勲管理官であるボーズ、そして『視覚的クラヴサン』の著者であるイエズス会士カステル神父。ダムザンの場合を除けば、こうした人々への紹介状は、すべてマブリー神父から頂いた。⁽²⁸⁾

次回には第二節としてコレージュ・ルイ・ル・グランの校風と哲学者エルヴエジウスの学生時代について詳しく述べる。

【図版説明】 若き日の〈哲学者たち〉の街、カルティエ・ラタンを一望できるよう、一八世紀中葉に作成されたパ
リ鳥瞰図の該当部分を本稿に挿入した。この有名な市街図はミッシェル・エチエンヌ・テュルゴアの監修によって一
七三四年から着手され、一七三九年に印行された。



テュルゴ監修『パリ市街図』（1739年刊，部分）



PLAN de TURGOT
1739

〈註〉

本稿における基本的な文献に關しては、上記の略号を使用する。

- Co : M. J. A. Nicolas de Caritat CONDORCET, *Oeuvres*, publiées par A. C. O'Connor et M. F. Arago, Paris, Firman Didot Frères, 1847, (Stuttgart—Bad Cannstatt, Friedrich Frommann Verlag, 1968.) 12 volumes.
- Da0 : Jean Le Rond D'ALEMBERT, *Oeuvres*, Genève, Slatkine Reprints, 1967, tome I.
- DDe : Denis DIDEROT et Jean D'ALEMBERT, *Encyclopédie, ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, Neuchâstel, Samuel Fauche, 1765.
- Dlo : Denis DIDEROT, *Oeuvres complètes*, présentée par A. W. Wilson et al., Paris, Hermann, 1975, tome I.
- Hd : Jacques HILLAIRET, *Dictionnaire historique des rues de Paris*, Paris, Les Editions de Minuit, 1963, 2 volumes.
- Hn : Jean—Chrétien—Ferdinand HOFFER, *Nouvelle biographie générale*, Paris, Firman Didot Frères, 1857—1864, 46 volumes.
- Hol : Claude—Adrien HELVETIUS, *Oeuvres complètes*, éd. par L. La Roche, Paris, P. Didot l'aîné, 1795, tome I. (Georg Olms Verlagbuchhandlung, Hildsheim, 1967.)
- Mb : Joseph MICHAUD, *Biographie universelle ancienne et moderne*, Paris, C. Desplaces, 1854—1865, 45 volumes.
- Rc : Jean—Jacques ROUSSEAU, *Les Confessions*, dans ROUSSEAU, *Oeuvres complètes*, éd. par Gagnevin et Raymond, Paris, Gallimard, 1959, tome I.
- Se : Jean Francois de SAINT—LAMBERT, *Essai sur la vie et les ouvrages d'Helvétius*, dans *Hol*, tome I, pp. 1—176.

(1) Se, pp. 1—3.

哲学者エルヴェシユスの出生と幼時については、本稿〈その六〉(『ヨーロッパ』第七号(一九九五年))を参照のこと。

(2) Thomas CASSIRER, Awareness of the city in the *Encyclopédie*, in *Journal of the History of Ideas*, July—Sept, 1963, pp. 390—392.

右の論文「『百科全書』における都市の意識」においてカッシーラーは項目〈パリ〉つぎのように評価する。

「シヨクールはさまざまな都市に大きな関心を寄せた。それらの個々について大抵は署名入りで書いており、そうした項目から判断すると、都市の歴史に関する情報収集家であったように思われる。彼の構想のなかにはヨーロッパにおける

主要都市の詳細な記述が組まれていた。そのように記述されていない唯一の都市は、第一巻のアムステルダムであって、*ジュクトール*が『百科全書』に参加する以前に刊行されている。

*ジュクトール*がパリを描写する方法は、都市に関する比較的長い項目の典型と言ってよい。ただし、フランスの首都について格段詳細に論じているのは当然と思われる。簡潔な地理的・歴史の導入のあと、彼は読者を市内観光に連れていく。ある地区からほかの地区へと廻って、主たる景観を指さし、それらの由緒や構造、さらには町名の由来について興味深い解説を与え、近年なされた改修や今後改善されるべき欠陥をも説明する。しばしば批判的な表現を挟むにも拘らず、彼は己の都市を誇りとし、いろいろな建造物の美や、とりわけ図書館の豊富さと優秀さに言及する機会を逃さない。そうした図書館で*ジュクトール*は人並み外れた勉勵を続けたらしい。パリに関連して彼が参照した文献は、帝政ローマの文学や中世の史料から現代の都市案内にまで及ぶ。(ibid., p. 391.)

- (3) Madweleine F. MORRIS, *Le Chevalier de JAUCOURT, un ami de la terre (1704-1780)*, Genève, Droz, 1979, pp. 1-7, 47-49.
- (4) Laure BRAUMONT-MAILLET, *Paris de la Préhistoire à nos jours*, Paris, Editions Boeckessoules, 1985, pp. 63-67.
- (5) Chevalier de JOUCOURT, Paris, dans *Dde*, tome XI, pp. 946, 952.
- (6) Jean TIBERI, *Le Quartier Latin*, Paris, Editions Sandt, 1988, pp. 92-94.
- (7) JOUCOURT, Paris, dans *Dde*, tome XI, pp. 947, 952.
- (8) TIBERI, *op. cit.*, pp. 111-114.
- Louis-Henri PARIAS et al., *Histoire générale de l'enseignement et de l'éducation en France*, Paris, Nouvelle Librairie de France, 1981, tome I, pp. 325-326, 343-348.
- (9) TIBERI, *op. cit.*, pp. 118-122. PARIAS et al., *op. cit.*, tome I, pp. 371-372.
- (10) JOUCOURT, Paris, dans *Dde*, tome XI, pp. 944, 952-954.
- (11) René POMEAU, *Voltaire en son temps I. D'Arnet à Voltaire*, Oxford, Voltaire Foundation, 1985, pp. 12-16, 25, 28, 37-39, 119-119.
- 右に挙げたボモールの近著『ヴォルテールとその時代』第一巻はヴォルテールの人間形成や文筆活動がパリの都市環境と密接に係わることを明らかにしている。なお、本稿では立ち入らないが、彼の出生をめぐっては時期や場所や経緯に関し複数の解釈が見出される。
- (12) CONDORCET, *Vie de Voltaire*, dans *Co*, tome VI, pp. 4-6.

なお、(哲学者たち)の出生や幼時について不明な部分が多い事実を、ヴォルテール研究の權威ベスターマンは以下のように説明する。

「十八世紀なかばまで子どもは小型の大人としかみなされなかった。それ以前には子どもの言動がほとんど記録されていない。ヴォルテールは自己分析のすくない人物で、自叙伝や人物紹介も貧弱であるため、彼の幼時については普通よりもなお判らない。出生の場所と日付すら激しい論議の的となった。」(Theodore BESTERMAN, *Voltaire*, Oxford, Basil Blackwell, 1969, p. 25)

(13) 福鎌忠恕著『モンテスキュー生涯と思想』酒井書店、一九七七年。第一巻、五、一三—一四、二六一、二七八—二七九、二九八—三〇一。

Robert SHACKLETON, *Montesquieu, a Critical Biography*, pp. 2, 4-7, 44, 57, 398.

右記のシャクトルトン著『評伝モンテスキュー』においてコレージュ・ユ・ジュイイの教育内容がどのように説明されている。

「[ジュイイの]教育そのものがオールラウンドであった。ラテン語とフランス語が学ぶべき主要な言語であり、ギリシア語はつねに副次的であった。ラテン語に熟達するのも必要とみなされたが、授業で用いる実際の言語はフランス語であった。地理、歴史、数学が時間割に組まれ、絵画、音楽、乗馬、フェンシング、ダンスなどの科目も教えられた。教育については幾人かのオラトリオ派の聖職者が深い思想を遺している。ベルナル・ラミーの『学問に関する対話』はオラトリオ派の基本的な考えを表す。信仰と礼拝を主たる目的としながら、彼らはその時代において前向きであり、進歩的であった。イエズス会やポール・ロワイヤルの学校が古典的教養に秀でた人物を送り出すとすれば、ジュイイはより全面的な人間を育成する。こうした理念は公正で均衡の取れたものであり、後年モンテスキューが自己の教育に不満を述べたとしても、それこそ当時のフランスにおいてもっとも自由な教育であった。」(ibid., p. 6-7)

(14) Arthur M. WILSON, *Diderot*, New York, Oxford University Press, 1972, pp. 11-12, 14-22.

(15) Madame VANDEUL, *Mémoires pour servir à l'histoire de la vie et des ouvrages de M. Diderot*, dans *Do*, tome I, pp. 9-12.

(16) *Hd*, tome II, p. 473. H. L. BOUQUET, *L'Ancienne collège d'Harcourt et le lycée Saint-Louis*, Paris, Delalain Frères, 1891, pp. 4-6, 43, 55-59, 68, 285, 303-305, 348-349, 664-667.

右に挙げたブーケ著『旧コレージュ・タルクールおよびリセ・サン・ルイ』は七百余頁に及ぶ浩瀚な学園史である。(こ)にはコレージュにおける学生の日課がどのように記載されている。

「十八世紀にはダルクルールの寮生に（過勞）という言葉はあてはまらない。起床は午前4時であった、と十六世紀の参事メモは語る。のちに平日は六時、日曜は七時の起床となった。六時十五分から一斉のお祈り。七時四十五分まで勉強し、続いて朝食。八時十五分から十時半まで教室へ行って各自の授業を受ける。十時半に礼拝堂に集まり、ミサに参加する。ついで教室に帰り、正午まで勉強する。昼食のあと一時半まで休憩。ふたたび授業に戻り、冬期には二時十五分から四時半まで、夏期には三時十五分から五時半まで勉強する。ここで茶菓と半時間の休憩。さらに勉強を続行して、八時に夕食。そのあとにお祈りをして、九時に就寝する。

水曜日は午後休暇となる。午前はミサのあとに宗教教育と初聖体カテキスムが行われ、新約聖書、教理問答書、そして「パリ日中聖務日課」のような祈禱書を持参することがすべての生徒に求められる。

土曜日はミサのあとに評価がなされ、各自の成績に応じて賞罰が与えられる。

日曜日と祭日は七時に起床する。七時半に礼拝堂に降りて、ミサおよび福音書に基づく説教を受ける。朝食のあと休憩。十時から学習室で勉強し、十一時四十五分から昼食と休憩。一時半にお祈りをしたのち、四時半の茶菓をなかに七時の夕食まで自由時間。そのあと休憩し、八時四十五分に就寝。」(ibid. pp. 370-371.)

(17) WILSON, *op. cit.*, pp. 23-36.

前述のコレージュ・ダルクルール学園史では、役職者と教授陣についての説明は詳しいが、個々の学生への言及はきわめてすくない。しかし、卒業生デイドロに関しては半頁にわたり厳しく論評が記載されている。十九世紀末にこの書物を執筆したブーケは、ソルボンヌ大学名誉教授およびリセ・サン・ルイ付属司祭の地位にあった。

- (18) 「一七三〇年頃にイエズス会の生徒がもうひとり学業を仕上げるためにコレージュ・ダルクルールへ来た。それはヴォルテールの哲学理論を普及させた人物、すなわち有名なデイドロである。ここへ入るや彼は校長から譴責を受けた。学友に對してあまりにも親切で、ラテン語の詩作という宿題を代筆したからである。そうした親切さがデイドロの特性であった。コレージュを出たあとも、彼は友人の書物を作り続けた、とひとは言う。その豊かな筆でありに多くを書き過ぎた。ラングルの刃物師の息子が文筆家としての偉大な才能を誤用して、恩師のキリスト教的な教えを忘れ去り、『百科全書』と呼ばれる巨大な武器を同時代の教会と社会に向けたことは、かえすがえす遺憾である。」(BOUQUET, *op. cit.*, pp. 379-380.)

Ronald GRIMSLEY, *Jean d'Alembert 1717-83*. London, Oxford University Press, 1963, pp. 1-4.
Thomas L. HANKINS, *Jean d'Alembert, Science and the Enlightenment*. London, Oxford University Press, 1970, pp. 18-20.
因みにダランベールが没した一七八三年、愛弟子コンドルセがフランスアカデミーにおいて「ダランベールへの讃辞」

を述べた。この演説のなかには幼いコンドルセの家族関係についてやや詳しい説明が含まれる。

「サン・ジャン・ルロン教会の近くに捨てられて、ダランベールはひとりの警視に発見された。平素峻厳な職務にあるとはいえ、幸いにも警視の心は冷酷でなかった。死にかけているひ弱な嬰兒が、公共の救護所では生存に必要な看護や世話を得られない、と彼は憂慮する。そこで品性や人格をよく知っている労働者に嬰兒を託した。わが祖国とわが世紀の名譽である人物、人知の体系に新たな真理をかくも多く付加するよう自然によって運命づけられた人物が生存できたのは、以上のような幸運によつてである。

その子捨ては一時的なもので、僅かな期間で終つた。ダランベールの父親がその事実を知つて、すぐさま償いをしたからである。息子が教育をうけ、独立して生活できるよう、彼は配慮した。これこそ自然と義務の道である。当人には黙つていたが、父方の一族もダランベールを大切にすべき肉親と考えた。そして、彼が著名になると、その一族は正しく認知して、親密であることを誇らしく思つた。」(CONDORCET, *Eloge de M. D'Alembert*, dans CONDORCET, *op. cit.*, tome III, p. 52.)

(19) D'ALEMBERT, *Memoire de par lui-même*, dans *DAe*, tome I, pp. 1-2.

なお、有償で庶民に基礎的な知識を授ける教師が、十八世紀フランスの都市部には多数存在した。当初ダランベールを受け入れた寄宿学校は、こうした教師が私的に設けたものであろう。(cf. PARIAS et al., *op. cit.*, tome II, pp. 404-407.)

(20) Andrée JACOB et Jean-Marc LERI, *Vie et histoire du Vie arrondissement*, Paris, Editions Hervas, 1986, pp. 39-42. Alfred

FRANKLIN, *Histoire de la Bibliothèque Mazarne et du Palais de l'Institut*, Paris, Welter, 1901, pp. 131-132, 189-192.

右に記したアルフレッド・フランクリン著「マザラン図書館・フランス学士院の歴史」はコレージュ・デ・クアートル・ナシオンの学園史を主要な内容としている。同学院における勉学の情景が、この書物ではつぎのように描かれる。

「コレージュ・デ・クアートル・ナシオンでは共同寢室を設けなかった。各々の生徒が自分の部屋を持った。部屋の配分は年度初めに学院院长が行なつた。その際に国籍の同じ生徒が、できるだけ近くになるよう配慮された。

どの部屋もほとんど同じ広さで、ひとつの窓から光が入っていた。家具といえば、寢台、机、三つの麦わら製椅子がある。檜の木で作られた寢台は、長さ六フィートで横三フィート。そして、羽毛を詰めた長枕とわら布団。麻と綿の織物で覆われた二つのクッションが備えられる。カーテンは草色のサージ織りで、長い飾り紐に縁取られていた。〔中略〕

コレージュ・デ・クアートル・ナシオンでは三十人の生徒に十人の教師がついた。一見多過ぎるよう思われる。これには説明を要するが、授業には外部からの生徒、この学院になんら係りを持たぬ生徒が、大挙して聴講に來た。古来パリで

(21)

はすべてのコレージュが、授業のときには無償で門戸を開いていた。こうした恩恵を利用する生徒は、雨ツバメと呼ばれる。定着するまえに彼らはある地点から他の地点へとツバメのように飛翔するからである。十七世紀の（大学地区）においてコレージュ・デ・クアートル・ナシオンは、そうした種類の聴講者をもっとも多く受け入れる学園であった。数学の授業に人気が集まったことが、大きな理由と思われる。パリではここが実際に自然科学を教える唯一のコレージュであった。」
(FRANKLIN, *op. cit.*, pp. 195, 199.)

D'ALEMBERT, *op. cit.*, tome I, pp. 1-2.

『マザラン図書館・フランクス学士院の歴史』の著者フランクリンは、コレージュ・デ・クアートル・ナシオンの古い名簿を調査し、著名な入学生を左のように列記する。

「一六九一年に（名門貴族）ポフォール家とサント・アルデゴンドの子弟を、また一六九六年にシヨヌ家の子弟を寮生として受け入れていた。一七一七年にはダンケルク出身のフィリップ・フランソワ・バールが入学した。彼は艦長ジャン・バルトの孫であり、サン・ルイの騎士・艦長バルトの息子である。三年後の名簿にガルバール・フランソワ・バルトの名が現われ、その弟と思われるが、確証はない。十八世紀になると、一七〇九年には哲学級の生徒としてニコラス・ソール・タバンヌ家の子弟を見出す。そして、有名な司祭パリ、編集者ジャン・ピエール・ニスロン。カンブロンは一七三七年に入学した。東洋学者エチエンヌ・フルモン、著名な弁護士アンリ・コーカン、神学者ニコラス・プチーラダル。同一の姓である三兄弟も生徒として見出せる。すなわち建築家フランソワ、外科医フィリップ、マザラン図書館管理人ルイ・シャルル・フランソワ。さらに挙げれば、詩人デトウーシユ、哲学者の父である医者エルヴェシウス、『教会史』の著者ボナヴァンチュール・ラシーヌ、有名な天文学者の息子バチスト・カジーニおよびジャック・カジーニ、ベネチクト派の学者プリュダン・マラン、多作の文筆家カアブル・ペロー、兄クレビヨン、『フランス図書館』を書いた神父グジェ、天文学者ニコラス・テリール、慈善病院院長の主任外科医フランソワ・モラン、文学者ニコラス・シャルブユイ、劇作家P・G・パリサン、ルイ一五世の眼科医ピエール・ドムール。

イエズス会士の弟子である高等法院院長エノーは、哲学級に入るためコレージュ・デ・クアートル・ナシオンに來た。タンサン夫人の私生児であり、ガラス屋の妻に拾われたダランベールは、十二歳で学寮に移され、一七三〇年コレージュ・マザランに入った。化学者ラヴォアジエはここで勉学した。パリ市長となるジャン・シルヴァン・ペーイはラカージュに師事して数学を究めた。最後に一七八八年キュスチヌの名が記帳されており、これは著名な將軍の息子と思われる。」

(FRANKLIN, *op. cit.*, pp. 249-250.)

- (22) GRIMSLEY, *op. cit.*, pp. 3-5, 9-11.
 HANKINS, *op. cit.*, pp. 19-23.
 なお、タランヌールは『百科全書』第三巻の項目(コレージュ)で中等教育の実情を痛烈に批判し、執筆者自身「若い頃に無駄にした月日を悔恨の気持なしに回顧できない」と誌した。この項目はイエズス会からの激しい攻撃に曝され、『百科全書』の事業から彼を離脱させる遠因となった。(拙稿「フランス『百科全書』における教育項目の意義および性格——タランヌール、マユマルゼンならびにルソーの執筆をめぐって」『教育学研究』第四五巻第四号(一九七八年十二月)、一四—二六頁)。
- (23) D'ALEMBERT, *op. cit.*, tome I, pp. 2-3.
- (24) Jean SCARD et al., *Corpus Condillac (1714-1780)*, Genève-Paris, Slatkine, 1981, pp. 24-25, 113-114.
- (25) Jean SCARD et al., *op. cit.*, pp. 31-41, 48-50, 114-115.
- (26) Morris, *op. cit.*, pp. 4-6, *Hm*, tome XXV, pp. 405-407. *Mb*, tome XX, pp. 502-503.
- Jean HEACHLER, *L'Encyclopédie de Diderot et Jaucourt, Essai biographique sur le chevalier Louis de Jaucourt*, Paris, Champion, 1995, pp. 33-90.
- (27) *Rc*, tome I, pp. 213-214, 237-239, 266-267, 280, 347-348. (ルソー著、桑原武夫訳【告白】、岩波書店、一九六五年。中、三〇五—三〇六、三三九—三四四、三七九頁、中、一五—一四—一五頁。)
- Jean SCARD et al., *op. cit.*, pp. 20-21, 43-48, 114-115.
- (28) *Rc*, tome I, pp. 282-283. (参考) ルソー著、桑原武夫訳【告白】、岩波書店、一九六五年。中、一九—二〇頁。)
- なお、【告白】の記述にもかかわらず、ルソーの二度目のパリ到着は、一七四二年夏と検証されている。(ibid., p. 1377.)